

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室／異文化コミュニケーション学部教授 高橋 里美

最近、「学ぶ」こととは何かについて考えさせられたことがあった。2018年1月に開催された異文化コミュニケーション学部主催の村野井仁氏（東北学院大学教授）の講演会でのことである。演題は「社会的存在としての第二言語学習者」で、講演の趣旨はCLIL (Content and Language Integrated Learning / 内容言語統合型学習) 的要素を持った英語活動の理論的背景の解説と実践例の紹介であった。

さて、私が考えさせられたこととは、村野井氏の言う「社会的存在としての学習者」という点である。つまり、学習者を社会に生きる主体的な存在として捉え、学習者自らにとって意味のある事柄について考えたことを、言語（ここでは英語）を使って他者に伝える活動こそが実質的な言語習得につながるという主張である。その中心にあるのは徹底した「社会事象を反映した本物の (authentic) 題材」の使用である。具体例として、村野井氏はVoices from Fukushima 2013プロジェクトという英語活動を挙げている。そこでは、英語学習者は原発事故の影響を受けている福島若者たちからの日本語によるメッセージを英語に訳し、それを海外に発信するとともに、海外からの返信メッセージを日本語に翻訳したものを福島若者たちに届けるという活動を行った。つまり、社会・地域の一員としての自覚のもとに英語を使用することで、英語力そのものの向上のみならず、自律学習につながる内発的動機づけを生み出し、それを維持していくことの重要性を説いている。私自身、全カリ英語の授業で時事関連を扱う「本物の教材」を使用する機会が多いが、学生の社会的主体性まで強く意識した英語学習活動は提供できていなかったように思われる。学びとは、学習者が社会的存在として意味のある行動をしていると実感できた時に生じるものなのだろう。また、そのような学習活動から自律する力が育まれてくるのであろうと、この講演を聞いて痛感した次第である。

この『大学教育研究フォーラム』第23号では、「大学でのスポーツ教育の役割」が特集されている。座談会の後半で、「学び方」を身に付ける場としての大学に言及があるが、スポーツ教育も言語教育も究極的には学生が生涯を通しての自律学習ができるようになることを目指している。そのためには、学生の社会的主体性を尊重した本物の題材を使った授業運営が望ましく、また、大学の授業とは本来そうあるべきなのだと思う。そのような学習環境の中から学ぶ力が生まれてくるということをここに強調したい。

たかはし さとみ